

# 第1章 戦場

樺太での避難生活

## 時計をよこせ！ 父のおかげで九死に一生

森川利一さんのお話から

私が小学校六年生のときに、日本はアメリカなどとの太平洋戦争に入りました。当時、私は、現在のサハリンの上敷香かみしずかというところにいました。昭和二十年（一九四五年）八月九日、突然、ソ連が攻めてきました。日本は八月十五日に降伏しました。ソ連は、戦争が終わる気配けはいを大体感じていたと思うのですが、突然、戦車や大量の大砲で攻撃こうげきしてきたのです。

終戦後の八月二十二日ぐらいいまでは、大泊おほとまりから日本の船で北海道に避難ひなんできました。しかし、私たち十五歳以上の男子は帰れませんでした。父と私は、母を北海道に避難させるため、上敷香かみしずかで母を見送りました。大変悲しい思いをしました。

大勢の男の人たちは南に向かって歩きました。場合によっては三百キロも歩かなければならなかったのです。ソ連がもし後ろから攻めてきたらどうなるかなど、いろいろな心配をしながら歩きました。私は同級生の友人と、そのお父さんと四人で一緒に歩きました。私の父は足が弱く、あまり長距離ちやうきよりを歩けませんでした。父は、足にまめをつくってしまって、「だめだ、ここで泊まろう」ということになりました。どこの家も空き家になっていたの、一番いい家に入りました。

米が配給はいきゅうになったばかりだったので、どこの家にも米がたくさんありました。それで、さっそく鍋なべにお米を入れて研といで、コンロに火をつけたのです。コンロといっても、今のようなガスではなく、炭です。

私の友達がたまたまその家の二階を見に行きました。そこには、その家のご主人と奥さんが

○大泊おほとまり 樺太からふと（今のサハリン）の南部にあった町。日本領有時は樺太庁からふとが置かれ、樺太の中心都市であった。表紙裏地図

白い着物を着て、座布団の上で二人が短刀で刺し違えていたのです。大変むごい、そういう悲しい場面に出くわしたのです。私はその様子を見に行けませんでした。自分の頭の上で大人の男の人と女の人が死んでいるというのが気持ち悪くて、まだ煮立っていない鍋を抱えて別の家へ移って、一晩泊まりました。しかし、その日はショックで眠れませんでした。

翌朝、ご飯を食べていたら、北の方から最後の汽車が来るといふ伝達がありました。さっそく駅に行つて待ちました。しかし、到着した列車は満員で、どこにも乗る隙間がないのです。

機関車は後ろに石炭を入れるところがあつり、その上があいていました。そこが唯一の乗る場所だと思ひ、父と私の二人が這い上がりました。あと何人かが乗つた記憶があります。機関車は石炭をたきますから、火の粉を浴びながら一時間ぐらい乗っていました。列車は知取というところどまりました。それが八月十九日です。そこで全員おろされて、その町の高等女学校に収容されました。既に大勢の人がいました。もう北海道へ行くこと



避難の様子

イメージ図

時計をよこせ！ 父のおかげで九死に一生

はできないと思つてあきらめました。

三日目の二十二日に、朝起きて外に出てみたら、坂道にソ連の戦車が三、四台、大砲を上に向けて並んでいるのを見てびっくりしました。

その一、二時間後に、女学校の高台から見ると、米粒ぐらいにしか見えない小さい漁船が沖の方を通過して北海道に向かっていたのです。見つけた兵士は、戦車の砲を海の方に向け、最初はおどして船の手前の何百メートルか前にどんと撃つたのです。水煙すいえんがばつと立ちました。その水煙すいえんに気づいた漁船は、なお一層沖の方に逃げようとしたので、今度は狙ねらいを定めて撃うちました。水煙すいえんがばつと上がりましたけれども、それがおさまったら、船の形は全然見えないのです。こっばみじんにされてしまったのです。

私たちはこの先どうなるかと思つていたら、ソ連の将軍しょうぐんから、「皆さんは自分の住んでいた街へ戻りなさい」という命令が出たのです。それで、やむを得えず、私たちは父と一緒に列車に乘せられました。一週間ぐらいかかって、やっと自分のふるさとに戻つたのです。



森川さんに迫るソ連兵

イメージ図

○自動小銃 銃弾の装填・発射を自動的に行う小銃。

○安全装置 銃にこめた弾丸の暴発を防ぐ装置(しくみ)。

そこに住んで十日ぐらいした頃、突然、自動小銃を持ったソ連の十七、八歳の若い兵隊二人が押し入ってきました。すると、その一人が、父は年をとっているのが分かったので、「あなたは土間に座りなさい。」と言うのです。そして、私の胸に自動小銃の銃口を押しつけて、時計を要求してきました。日本の兵隊はみんな時計を持っていたのですが、ソ連には物が無いものですから、時計を欲しがったのです。私は、手まねで時計はないと言いました。しかし、信用してくれません。隠していると思ったでしょう。なお一層銃口を胸に強く押しつけて、倒れそうになりました。安全装置をがちゃがちゃさせながら、なお一層強く押しつけてきたのです。

私は、そのときに、もうこれで終わりかな、ここで私は死ぬのかなと思いました。父もそう思ったのでしょう。土間に手をつけて、一生懸命に懇願したのです。息子を助けてくださいと懇願したのです。そうすると、人間同士ですから、ソ連の兵隊も、その状態を見て何か感じたのでしょう。正直にないということ認めてくれ、何もとらないで帰りました。私の父さんがもし土間に手をついてお願いしなかったら、あるいは、どんとやられたかもしれません。

今、皆さんも私も、戦争が終わった後は、平和で幸せな生活を送っていますが、大勢の人たちが戦争で犠牲になったおかげで私たちがこのように平和で暮らしているのです。ですから、かつて戦争があったことと、今の幸せを絶対に忘れないでほしいと思います。

DATA

平成22年度豊平区平和事業  
聴き取り

- ・平成22年11月2日
- ・つきさっぷ郷土資料館



森川利一(もりかわ・としいち)さん

- ・昭和4年(1929年)生まれ
- ・札幌市豊平区在住

時計をよこせ！ 父のおかげで九死に一生